

# 宇治十帖における物の怪についての一考察

## —浮舟物語との関わりを中心に—

金 賢 貞

「源氏物語」五十四巻における物の怪の用例は全部で五十三例ある。その中で、宇治十帖の十巻における物の怪の用例は十例で、巻別に用例が集中して出てくる場合はあるが、全体的に非常に均衡の取れた割合となっていて、興味深いと思う。

宇治十帖における物の怪の用例は、「宿木」巻に一例、「浮舟」巻に三例、「蜻蛉」巻に一例、「手習」巻に四例、「夢浮橋」巻に一例ある。これを見ると、「宿木」巻の一例を除いては、宇治十帖の最後の四巻にその用例が集中していることが分かる。宇治十帖の後半の物語にあたるこの四巻では、浮舟という女主人公を中心に話が展開されている。浮舟は大君、中の君とともに宇治十帖におけるもっとも主要な女主人公の一人で、特に宇治十帖の後半部は、ほとんど彼女の物語と言っても過言ではない。物の怪はこの浮舟の物語になくてはならない重要な要素として、物語の中で大きな位置を占めているのである。

宇治十帖における十例の物の怪の用例を見ると、物の怪に取り憑かれたとされる人は浮舟を含め五人である。「宿木」巻の一例は女二の宮の母の藤壺の女御の死に関わる物の怪の話である。

「手習」巻には女一の宮に取り憑いた物の怪の話が二例出てくる。「浮舟」巻には左近少将の妻に取り憑いた物の怪の話が一例、

「蜻蛉」巻には匂宮に関わる物の怪の話が一例ある。そのほかの五例はすべて浮舟に関わる物の怪の話である。女一の宮に取り憑いた物の怪や左近少将の妻、匂宮に関わる物の怪の場合も、後述するつもりであるが、浮舟物語と密接な関わりを持っている。

これから宇治十帖における物の怪の特徴とその物の怪が「源氏物語」の中で果している役割などについて、本文を引きながら考察してみたいと思う。

まず、一例しかない「宿木」巻の物の怪について見てみたい。

(1) いにしへより伝はりたりける宝物ども、このをりにこそはと探し出でつつ、いみじく営みたまふに、女御、夏ごろ、物の怪にわづらひたまひて、いとはかく亡せたまひぬ。(宿

木「三六四頁」

ここで物の怪に取り憑かれて亡くなったのは今上帝の女御で、女二の宮の母である。これは女二の宮が十四歳になって裳着の用意をしている折のことで、母の藤壺の女御が病氣になり、あつてなく亡くなってしまうのである。

この「宿木」巻の一例を除いては、宇治十帖に出てくる物の怪がすべて浮舟物語と密接な関わりを持っているのは、先述したとおりである。そのため、残りの九例の用例について考察するためには浮舟物語についての言及が欠かせないものである。これから浮舟物語について詳しく述べながら、それに沿って物の怪の用例の本文と内容を見ていきたい。

二

浮舟は大君と中の君の異母妹で、八の宮が北の方を失った直後、女房であつた中将の君に生ませた娘である。しかも、八の宮はこの娘を認知しない。宮に厭われていた中将の君は、幼い浮舟を伴って八の宮家を出て、常陸介の後妻となつて下国してしまう。その母のもと、浮舟は東国で育つ。

このような浮舟が「源氏物語」にはじめて登場するのは「宿木」巻である。大君が亡くなった翌年の九月、依然として大君を恋しく思いつづけていた薫は、中の君を訪ねて、宇治の山荘を改造して大君の人形を安置したいと語った。この時、中の君は薫の

懸想をそらすために大君に似ている異母妹、浮舟の存在を告げたのであり、これが「源氏物語」における彼女の初登場である。

翌年四月、宇治で初瀬詣から帰る途中の浮舟をかいま見た薫は、亡き大君に似た浮舟に心をひかれ、宇治の弁の尼に仲介を依頼する。

浮舟の母中将の君は、そのような薫の希望を嬉しく思いながらも、自分の八の宮との体験に照らし身分違いの結婚の不幸を恐れ、左近少将を浮舟の婿と決めていた。しかし、左近少将は浮舟が常陸介の実子でないことを知って、浮舟を捨てて実子の娘に乗り換えて結婚してしまう。継子であるためそのようなひどい目にあつた浮舟を不憫がる母のはからいで、彼女は中の君の二条院に預けられ、薫のもとに行くことになる。

一方、中の君の邸で匂宮は、思いがけず美しい女性を発見し、心ひかれるようになる。彼はその女性が中の君の妹の浮舟とは知らずに言い寄つたが、急に参内することになつたので、その場は何事もなかった。しかし、事情を聞いて驚きあわてた中将の君は浮舟を三条の小家に隠す。宇治の弁の尼からそのような事情を聞いた薫は、浮舟を連れて大君との思い出のある宇治に行く。

しかし、匂宮はそこまでも追い求め、薫に先立って浮舟を手に入れようとする。薫の来訪を待ちつづけていた浮舟に、匂宮は薫をよそおって近づき、強引に浮舟と契りを結んでしまう。はじめは浮舟も驚きと恥ずかしさのあまりひたすら泣き伏すばかりで

あった。しかし、句宮の愛は「時の間も、見ざらんに、死ぬべし」と思うほど激しく燃えるもので、浮舟は薫に罪悪感を感じながらも、句宮の激しい熱情について心まで奪われてしまう。

一方、そのようなことは夢にも知らぬ薫は、近々京に浮舟を迎え取るつもりだという。久しぶりに来訪した薫に大して浮舟は「行く末ながく、人の頼みぬべき心ばへなど、こよなく、まさり給へり」と彼の誠実な人柄に心をひかれる。しかし、句宮の燃えるような激しい愛情も忘れがたく、浮舟は悩みつづける。

(2)「日ごろあやしくのみなむ。はかなき物もきこしめさず、悩ましげにせさせたまふ」と言へば、あやしきことかな、物の怪などにやあらむ、と、「いかなる御心地ぞと思へど、石山とまりたまひにきかし」と言ふも、かたはらいなければ伏し目なり。(「浮舟」一五六頁)

これは、母中将の君が浮舟のひどく「青み瘦せ」た様子を見て驚き、妊娠ではないかと心配するところである。浮舟は、薫の誠実さにも心ひかれ、句宮の悄然にも恋慕の情をおさえがたく、二人の男性の間でひどく思い乱れているのである。

句宮、薫両方との文通が続き、薫はひそかに浮舟を京に迎える準備を急ぐが、それを知った句宮も隠れ家を用意する。二人の中心で思いまどう浮舟の気持ちも知らずに、母と乳母は京移りの支度に余念がない。

浮舟と句宮との関係は、とうとう薫の知るところとなり、薫は

句宮と浮舟の関係について恨みの文を送ってくる。右近や侍従もそれぞれに忠告し、侍女の右近は三角関係に陥って身を滅ぼした姉の話聞かせる。浮舟はどちらを選ぶにせよこの困難を切り抜けることはできないと思い、死を決意する。

(3)今参り童などのめやすき呼びとりつつ、「かかる人御覽ぜよ。あやしくてのみ臥させたまへるは、物の怪などのさまたげきこえさせんとするにこそ」と喚く。(「浮舟」一七四頁)

薫の命令で宇治の警戒が嚴重になったことが知らされ、浮舟はただ死にたいと激しく悩むばかりである。その時、事情を知らない乳母は、京移りの支度をしながらいい気持ちになって、浮舟を元気づけているのである。

やがて自ら宇治を訪れた句宮が、薫の警護の武士にはばまれてむなしく帰るという事件が起きる。「まろは、いかで死なばや。

世づかず、心憂かりける身かな」と悲嘆の底で死を思っていた浮舟が、薫と句宮の中で悩みつづけた末に、とうとう宇治川への入水を決意する。「浮舟」巻は、浮舟が死を前にして句宮と母に手紙を書くという話で終わっている。

(4)参り来まほしきを、少将の方の、なほいと心もとなげに、物の怪だちて悩みはれば、片時も立ち去ること、といみじく言はれはべりてなむ。(「浮舟」一八六頁)

これは、京にいる浮舟の母からの手紙の中の文章である。浮舟が死を決意した時、母中将の君は不吉な夢を見る。すぐ浮舟の所

に行きたいが、娘の左少将の妻が産が近く、物の怪めいて煩っているのである。そのため、彼女のそばを離れることができない。自分は行けないが、加持祈禱をさせよと言っている。浮舟はそのような母の手紙を読んで悲しく思いながらも、心強く今宵は宇治川への入水と思い定める。

『蛸蛉』巻は、突然いなくなった浮舟のことで大騒ぎをする宇治の人々の様子からはじまっている。事情を知っていた右近と侍従は浮舟が入水したと推察して、世間体を繕うため母中將の君を説得して、亡骸のないままに葬儀を営んでしまう。浮舟が死去したと聞いた薫と匂宮も悲嘆の涙にくれるばかりである。

(5)かの宮、はた、まして、二三日はものもおぼえたまはず、現し心もなきさまにて、いかなる御物の怪ならん、など騒ぐに、やうやう涙尽くしたまひて、思し静まるにしもぞ、ありしさまは悲しういみじく思ひ出でられたまひける。〔蛸蛉〕二〇

#### 六頁)

薫の嘆きも並々ではなかったが、それにもまして嘆き悲しむ匂宮の様子がよく現われているのがこの場面である。

伏して激しく泣いていたところを横川の僧都一行に救われたのである。

荒れぬ宇治院の裏庭の木の下の下で泣いていた。実は、宇治院の裏庭では、狐が化けているのだ、魔性の物だと言ひ強いが、僧都は

「これは人なり」と主張して妹尼に預け、介抱を頼む。僧都の妹尼は、浮舟を亡き娘の身代わりとして長谷の観音が授けた人と思ひ込み、手厚く介抱する。そうして、浮舟は小野の里にある尼君の庵に連れ帰られたが、なかなか健康が回復しない。妹尼の切なる願いによって、僧都が祈禱して浮舟に取り憑いていた執拗な物の怪を退散させ、彼女はやつと健康を取り戻す。

(6)月ごろ、いささかも現れざりつる物の怪調ぜられて、「おのれは、ここまで参うて来て、かく調ぜられたてまつるべき身にもあらず。昔は、行ひせし法師の、いさかなる世に恨みをとどめて漂ひ歩きしほどに、よき女のあまた住みたまひし所に住みつきて、かたへは失ひてしに、この人は、心と世を恨みたまひて、我いかで死なん、といふことを、夜昼のたまひしに頼りをえて、いと暗き夜、独りものしたまひしをとりてしなり。されど、観音とぞまかうざまにはぐくみたまひければ、この僧都に負けたてまつりぬ。今はまかりなん」とのしる。〔手習〕二八二頁)

これは横川の僧都の加持によって物の怪が現われて去る場面で、その物の怪が自ら自分の素性を明かしている。よりましに移された物の怪のこのような言葉によって、浮舟に取り憑いていた物の怪の正体が「昔は、行ひせし法師」の死霊であることがはっきり分かる。ささいな恨みをこの世に残して極楽往生できずに中有にさまよい、「よき女のあまた住みたまひし所」に住みついたと

語っている。その「恨み」について詳しいことは語られていないが、一般的に女性関係の恨みであろうと推測されている。

『源氏物語』に出てくる物の怪の中で、その正体ははっきり分かるのは六条御息所の物の怪と、浮舟に取り憑いたこの某法師の物の怪だけである。これらは加持祈禱によって出てきて、自ら自分の正体について語っているため、『源氏物語』に出てくるほかの無名の物の怪とは性格を異にする。

六条御息所の物の怪は『源氏物語』の正編における物の怪の話の中心をなしている。六条御息所の物の怪は葵の上、紫の下、女三の宮などの主要な女主人公たちに関わって大きな活躍ぶりを見せており、『源氏物語』の話の流れの中に重要な位置を占めている。

正編の六条御息所の物の怪とともに、宇治十帖で活躍するのはこの「昔は、行ひせし法師」の死霊である。宇治十帖に出てくる十例の物の怪の用例の中で、この法師の物の怪をさしているのは二例しかない。にもかかわらず、この法師の物の怪は非常に印象が強く、宇治十帖における物の怪の全体の性格を印象づけている。それはおそらく、ほかの八例の物の怪の場合、無名のままその正体ははっきりせず、物語の流れにもそれほど深く関わっていないためと考えられる。それに比べ、この法師の物の怪は自ら自分の正体について語っているため、読者はまずはっきりした印象を受けるはずである。さらに、浮舟物語のクライマックスともいえる

浮舟入水事件に深く関わっているのも、その役割が非常に大きいのもその原因があるといえよう。

ところで、横川の僧都の加持のおかげでやっと健康を取り戻した浮舟は、妹尼のかつての娘婿中将の懸想されるが、以前の愛欲の苦悩に戻るのを恐れて強く拒みつづける。

一方、宇治では薫による四十九日の供養や一周忌の法要など、浮舟はもう故人として扱われていた。しかし、思いがけないことから、薫に浮舟生存の事実が伝えられることになる。

浮舟がまだ生きていることを薫が知ることになった経緯には、一品の宮、すなわち女一の宮に憑いた物の怪が重要な役割を果たしている。女一の宮は今上帝の第一皇女で、母は明石中宮である。紫の上に愛育され、薫からも常に高額の花として賛美された女性である。この女一の宮に憑いた物の怪が一方ならず執拗であった。

(7)下衆下衆しき法師ばらなどあまた来て、「僧都、今日下りさせたまふべし」「などにはかには」と問ふなれば、「一品の宮の御物の怪に悩ませたまひける、山の座主御修法仕まつらせたまへど、なほ僧都参りたまはでは験なしとて、昨日二たびなし召しはべりし。右大臣殿の四位少将、昨夜夜更けてなん上りおはしまして、後の宮の御文などはべりければ下りさせたまふなり」など、いとほやかに言ひなす。(「手習」三三)

○頁

物の怪に悩む女一の宮のために横川の僧都が修法に招かれる。

僧都の効験は著しく、物の怪は調伏されて、女一の宮は回復する。

一方、浮舟は中将の強引な求愛を避けて母尼の部屋に逃げ込んだ時に目撃したその母尼の老醜の姿に死の恐ろしさを感じ、死よりも出家を願うようになっていた。女一の宮の祈禱に召された僧都が下山の途中小野に立ち寄ったので、その機会に浮舟は僧都に懇願して出家を遂げる。出家後、仏道修行と手習に専念する日々が始まり、浮舟はやつと心の安らぎを得る。

(8)「あやしく。かかる容貌ありさまを、などて身をいとはしく思ひはじめたまひけん。物の怪もさこそ言ふなりしか」と思ひあはするに、「さるやうこそあらめ。今までも生きたるべき人かは。あしきものの見つけそめたるに、いと恐ろしく危きことなり」と思ひて、「手習」三三四頁)

僧都にとっては、浮舟が出家を望む理由は十分に納得できない。しかし、その理由のいかんを問はず出家すること自体は仏道に叶っている、僧侶の立場に戻って考えるのがこの場面である。

(9)御物の怪の執念きこと、さまざまに名のるが恐ろしきことなど、のたまふついでに、「いとあやしく、稀有のことをなん見たまへし。この三月に、年老いてはべる母の、願ありて初瀬に詣でてはべりし、婦さの中宿に、宇治院といひはべる所にまかり宿りしを、かくのごと、人住まで年経ぬるおほきなる所は、よからぬ物必ず通ひ住みて、重き病者のためあしきことどもや、と思ひたまへしもしく」とて、かの見つけたたり

し事どもを語りきこえたまふ。(「手習」三三三頁)

これは浮舟の出家後、僧都が女一の宮の夜居の奉仕に参つた折のことである。明石中宮が僧都を相手に、女一の宮に取り憑いた物の怪の執念深いことなどについていろいろと話しているうち、同じように執拗な物の怪の仕業によつて宇治院の裏で正体なく泣いていた女性の話が導き出される。その話を聞いた中宮が、薫と匂宮の浮舟への関わりを察知して、心を傷めていたため、後に薫にだけ知らせることになる。浮舟生存の事実が薫に伝えられる経緯が、女一の宮に憑いた物の怪の一つのきっかけとして非常にうまく、無理なく展開されているのである。

浮舟がまだ生きていることを知った薫は、浮舟の弟である小君を使者として小野へ遣わす。小君は薫の手紙をもつて浮舟のもとを訪れて薫への返事を強く求める。浮舟は昔を思い出させるその弟の顔をほのかに見て、悲しい母を思い、なつかしさに耐えず涙を流す。

(10)主、その小君に物語すこし聞こえて、「物の怪にやおはすらん、例のさまに見えたまふをりなく、悩みわたりたまひて、御かたちも異になりたまへるを、尋ねきこえたまふ人あらばいとわづらはしかるべきことと、見たてまつり嘆きはべりしもしく、かくいとあはれに心苦しき御ことどものはりけるを、今なむいとかたじけなく思ひはべる。日ごろも、うちはへ悩ませたまふめるを、いとどかかることどもに思し乱る



るにや、常よりもものおぼえさせたまはぬさまにてなむ」と  
聞こゆ。(「夢浮橋」三七九頁)

これは妹尼が浮舟に代わって小君と対話する場面である。浮舟はなつかしさに耐えず涙を流しながらも、心強く対面をきっぱりと拒否する。結局小君は姉に会えず、むなしく帰途につくのである。

以上、浮舟物語を中心に宇治十帖における物の怪の用例を見てきた。このように宇治十帖に出てくる物の怪は、浮舟物語の一部分となつて、話の展開にいろいろな役割を果たしているのである。次に、これらの用例をもつて、その役割や特徴などについてまとめてみたいと思う。

### 三

前述したとおり、宇治十帖における十例の物の怪の中で、その正体はつきりしているのは前掲(6)の「昔は、行ひせし法師」の死霊だけで、この物の怪が浮舟物語の中でもつ意味は非常に大きいと考えられる。この法師の物の怪は、用例の数は二例に過ぎないが、浮舟入水事件に深く関わっているのも、それについてまず考察してみたい。

浮舟はしばしば指摘されているように意志が弱く、主体性に欠けている人物である。浮舟は自分自身の意志で生きるのではなく、母親などのまわりの環境や状況に受動的に動かされる生を生き

いる。

ほかの人にとつての浮舟の存在も同じである。薫にしてみれば、浮舟の存在はあくまでも大君の身代わりである。一人の女としての浮舟は、薫に認められていなかったのである。宇治院で横川の僧都一行に救われた後も、浮舟は妹尼の亡き娘の身代わりとして扱われている。浮舟という一人の人格としてというよりは、誰かの身代わりとしての意味をもち、大事にされる傾向が強いのである。

このように入水前の浮舟は生き方があくまでも受動的であり、自分の強い意志で何かをやり遂げることなどはほとんどなかった人物である。そのような浮舟がいくつらい状況の中で苦しんでいたからといっても、自ら死を選び、それを実行にまで移したということはあまりにも不自然に思われてならない。

もちろん、進むべき道の見えないような窮地に陥った時、人間は誰でも死を考える。特に浮舟のように心が弱く、確固たる自分の意志なども持っていない人こそ死に解決をもとめやすいかも知れない。浮舟も、薫と匂宮という二人の男性の間で激しく悩まながら、「まろは、いかで死なばや。」と繰り返して死を考えている。

しかし、苦しい状況で死を考えるのは一般的な人情であるとしても、それを実行に踏み切る人は極めて少ない。自ら自分の命を絶つにはよほどの決断力と強い意志がなくてはならない。浮舟のような性格の人物が、追いつめられたあげくに自殺を決意したと

しても、それを実行に移すにはとても無理があるように思われる。紫式部は、浮舟の入水をもつともなごととして読者を納得させるための二つの手段として、物の怪を用いたのではないだろうか。

もちろん、しばしば指摘されていることく、紫式部は物の怪だけではなく、浮舟が必然的に死にまで追い込まれていくよう人間関係や状況などを緻密に用意している。秋山虔氏は「浮舟が投身にまで思い至るということは、浮舟自身にそうした行為の選択はまったく許されていない。そう思い立つという性質のものでなく、あくまで、そうでしかありえないところに必然的なかたちでもって追いつめられてしまったというべきものである」(注2)と述べられている。

確かに浮舟が自殺を思い立ち、入水にいたるまでの経緯が非常に緻密に、確かな構想をもって展開されていることは事実である。しかし、浮舟に自殺を実行に移させるためには、もう一つの必然性が必要だったのであり、紫式部はそれを物の怪に託したのである。

このような事実は物の怪が去り、意識を回復した浮舟が失踪前後のことを回想する言葉からも裏づけられる。

「いといみじ、とものを思ひ嘆きて、皆人の寝たりしに、妻戸を放ちて出でたりしに、風ははげしう、川波も荒う聞こえしを、独りもの恐ろしかりしかば、来し方行く末もおぼえて、簀子の端に足をさし下しながら、行くべき方もまはれて、

帰り入らむも中空にて、心強く、この世に亡せなん、と思ひたちしを、をこがましうて人に見つけられむよりは鬼も何も食ひうしなひてよ、と言ひつつくづくとゐたりしを、いときよげなる男の寄り来て、いざたまへ、おのがもとへ、と言ひて、抱く心地のせしを、宮と聞こえし人のしたまふとおぼえしほどより心地まどひにけるなめり。知らぬ所に据ゑおきて、この男は消え失せぬ、と見しを、つひに、かく、本意の事もせずなりぬる、と思ひつつ、いみじう泣く、と思ひしほどに、その後のことは、絶えていかにもいかにもおぼえず。

#### 〔手習〕二八四頁

この言葉を見ると、入水と決めて部屋は出たものの、自分一人ではどうすればいいのか分からず、鬼でも何でもいいから自分を食い殺してほしい言っている。自殺を思い立ち、それを行動に移そうとしているこの時でさえ、作者は浮舟が意志を持つことなど許していない。浮舟は自ら川の中へ入るのではなく、一人で恐ろしい状況の中でおびえながら、自分の命を自分以外の何ものかにかまかせようとしている。この場合、結局未遂に終わってしまったが、自殺を執行させるためには外部の何ものかが必要だったのであり、それは鬼でも狐でも妖怪でもよかったはずだが、作者は物の怪を選んだのである。浮舟に取り憑いた某法師の物の怪は、浮舟の入水実行を必然的なものにさせる一つの重要な要素として使われているのである。



ここで一つはつきりさせておきたいのは、浮舟に悪い某法師の物の怪が浮舟の入水に関わったのは、浮舟が自殺を決意し、部屋を出た後のことであるということである。浮舟の入水の決心そのものには物の怪が関わっていない。

このような事実は、その某法師の物の怪の言葉を見れば、明らかに。「この人は、心と世を恨みたまひて、我いかで死なん、といふことを、夜昼のたまひしに頼りをえて、いと暗き夜、独りものしたまひしをとりてしなり。」と言っている。人の弱り目に悪くという物の怪の性質がここにもよく表われているが、物の怪は浮舟がひたすら死にたいと言っていることに目をつけ、彼女が部屋を出て一人になっているところに取り憑いたのである。浮舟が自殺を決意するところまでは物の怪の関わりがないということをはつきりさせたいと思う。

次に宇治十帖の物語の中で重要な役割を果たしているのは、前掲(7)及び(9)の女一の宮に取り憑いた物の怪である。もう亡き人と信じられていた浮舟がまだ生きていると分かるようになる経緯に、女一の宮に悪い物の怪が深く関わっていることはすでに述べたとおりである。紫式部は人物や状況を緻密に用意しておいた上、物の怪をうまく使い、偶然に事実が薫に伝えられるような無駄のない構成をしたのである。

もう一つ、紫式部は浮舟を出家させるための背景にも、この女一の宮に悪い物の怪を介在させている。

宇治院近くに倒れていた浮舟を自分の亡き娘の代わりに授けられてものと信じ、手厚く介抱し、慈んだのは僧都の妹尼である。この尼君がそばにいるかぎり、浮舟はいくら出家を願ってもなかなか出家できそうにはない。浮舟の出家後、まだ若く行く先の長い浮舟が出家してしまったことについて一番悲しんだのもこの尼君である。

このような尼君が亡き娘の代わりに浮舟を授かった謝礼に初瀬詣でに出かけたのは、出家を願う浮舟にとっては絶好のチャンスであったのである。その尼君の留守中、横川の僧都を浮舟のところに立ち寄らせ、彼女を出家させるためには、何らかのきっかけが必要だったのであり、紫式部はそれを女一の宮の物の怪に託したのである。折しも尼君がいない時に、僧都が女一の宮の物の怪の調伏を明石中宮に依頼され、下山の途中に小野に立ち寄ってくる、そこで浮舟は僧都に懇願して出家を遂げてしまおう、という成り行きである。浮舟を出家させる状況背景にも、実は物の怪が必然的な形で潜んでいるのである。

今度は、前掲(4)の左近少将の妻の悪い物の怪の役割について述べてみたいと思う。浮舟が死を決心した時、母中将の君は不吉な夢を見る。すぐ浮舟のそばに行きたいが、娘の左近少将の妻が出座のため物の怪めいて煩っているので、そばを離れることができない。

ここで、左近少将の妻に取り憑いた物の怪も、浮舟を死に追い

込むための一つの手段として使われていることが読み取れる。もし、このような事情がなくて、中将の君が自殺を決意した浮舟のところにすぐ来ることができたら、浮舟は最も信頼している母に自分の悩みを話したかも知れない。中将の君が適切な解決策を与えるか、薫と匂宮のどちらかを強く勧めるかすれば、浮舟は入水を図るところまで到らなくて済んだかも知れない。意志の弱い浮舟は、どうすればいいのか分からず激しく悩んだあげく、死を決意する。浮舟をそのまま自殺に踏み切らせるためには、彼女の支えであり、最も信頼できる味方である母を浮舟のそばから離しておく必要があったのである。紫式部は前もって左近少将の妻の妊娠を用意しておいて、浮舟が最も母を必要としている時、中将の君が浮舟の自殺実行の障害にならないように物の怪という手段をうまく使っているのである。

これ以外の物の怪は、浮舟物語の一部分にはなっているが、物語の中でそれほど重要な役割を持たない。二人の男性の間で思い悩む浮舟の様子や、浮舟失踪後嘆き悲しむ匂宮の様子などを見て、物の怪の仕業ではないかと人々が推測する程度のものである。この場合、物の怪は葛藤や悲しみなど苦悩の程度をより効果的に表わす役割を果たしている。しかし、物語の流れに大きな影響を及ぼしたりすることはないのである。

このように、宇治十帖における物の怪は、「宿木」巻の一例を除いては、直接的または間接的に浮舟の入水、出家、出家後の物

語の展開に深く関わり、それぞれ物語の展開に必然性を与えたり、状況描写の一部分をなしたりしている。

### ▲注▼

1 本稿において「源氏物語」の本文は、小学館の日本古典文学全集「源氏物語」に拠った。

2 「源氏物語の世界」 秋山 虔 東京大学出版会 一九八二年一〇月

### ▲参考文献▼

- 1 「平安朝物語の研究」 藤岡常夫 風間書房 昭和五十六年一月
- 2 「源氏物語の主題と構想」 高橋和夫 桜楓社 昭和四一年二月
- 3 「源氏物語の〈物の怪〉」 橋本勝義 笠間書院 一九九四年六月
- 4 「源氏物語辞典」 (別冊国文学 No. 36) 秋山 虔 学燈社 平成元年五月

(きむ ひよんじょん 岡山大学文学研究科修士課程二年)

### 研究室受贈図書雑誌目録(一)

(平成七年一月～十二月)

#### 単行本

岡山大学文学部研究叢書11 フロベール論考2(岡山大学文学部)

おくのほそ道(赤羽学)

小倉百人一首異見抄(野木可山)

笈の小文・更科紀行(赤羽学)

国文学文献目録1993年版(朋文出版)

柴橋(赤羽学)